

学び続ける素地をはぐくむ生活科

—— 幼児教育とのつながりから ——

Life sciences that nurture the foundation for continuing to learn

—— From the connection with early childhood care and education ——

工 藤 ゆかり

KUDO Yukari

要 旨

1992（平成4）年度から小学校第1学年と第2学年に設置された生活科は、現在どこの幼稚園・保育所・認定こども園と小学校とで行われている連携の第一歩となった。また、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図る中心的教科である。生活科は、幼児期の発達の延長線上にある小学校低学年の発達状況に即した学習内容・教育方法であり、生活科を中心とする『スタートカリキュラム』の中で、子どもの育ちのつながりを保障することが求められた。一方、幼児教育側も2017（平成29）年改正の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領から、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を明確化し、小学校以降の教育や生涯にわたる学習との繋がりを見通して、幼児教育の実践に当たることが求められた。

学び続ける素地を育むための生活科の在り方としては、3つのことを導き出した。まず第1に、小学校教育のスタートラインである導入期に、生活科及び他の教科も含め授業時間を分割したり幼児教育の手法を取り入れたりなど適度な段差とし、どの子もその段差を登っていけるようにすることである。第2に、幼児期の学びの芽生えから小学校以降の自覚的な学びへつなげるために、幼児期の終わりまでに育った姿を存分に発揮できるようにすること。その際、幼児期の学びをなぞるのではなく、児童が自分の成長を自覚し学ぶ喜びを感じられるようにステップアップすることである。第3に、小学校教育における各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程、時間割に沿った1日の流れの中で、生活科の科目を通して子どもの思いや願いを活かした学びの実現である。幼児教育の「環境を通しての教育」、「遊びを通しての総合的な学び」を参考に、子どもの思いや願いを達成できる学びを積み重ね、「学習面での自立」に繋げる。

近年の少子化、核家族化、都市化、情報化から、子どもの生活は閉鎖的になっている。そのような状況であるからこそ、「自然」、「他者」、「自己」、「社会」と出会い、具体的な活動や経験を通して自立の基礎を培う生活科は、子どもの育ちに重要な役割を果たすと言える。

キーワード：スタートカリキュラム、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、段差、

学びの芽生え、自覚的な学び、自立への基礎を養う

1 はじめに

生活科は、1989（平成元）年に新設され、1992（平成4）年度から施行された学習指導要領より小学校第1学年および第2学年に設置された。当時、公立幼稚園にて幼児教育に携わっていた筆者は、この生活科の新設に伴い、幼児教育と小学校教育との連携・接続が進んだと感じた。

それは、生活科が新設されてから、近隣の小学校から幼稚園の教育実践を見学に来られる先生方が増えた。それ以前から運動会や生活発表会などの行事に小学校長または教頭が来園することはあったが、どちらかという子どもを送り出す幼稚園の方が小学校の運動会、学習発表会に修了児の様子を見に行く、就学時に指導要録を持参しての引継ぎなど、積極的にアプローチしていた。生活科の新設以降は担任教諭などを含む様々な立場の小学校教諭が幼稚園の教育実践を参観されるようになり、幼児教育で実践している「直接的・具体的な体験を通しての学び」、「教科書のない教育の在り方」などについて質問されたことを記憶している。このように、生活科の新設が、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校との連携の具体的な取組の第一歩になったと捉える。

また、筆者が幼稚園児と園外保育で近隣の公園に散歩に行った際に、幼稚園の修了児が小学校1年生の生活科の授業で、草花を摘んだり虫を観察したりするところに出会った。幼稚園の年長児も同じ公園でほぼ同じ遊びを展開していた。

幼稚園児の遊びと小学校1年生の生活科の具体的な活動や体験を通した学習との相違点は、幼児はタンポポ摘み、虫捕り、固定遊具での遊び、鬼ごっこ、それぞれの幼児が興味・関心をもったことに主体的に取り組んでいた。また、それぞれの幼児の遊びが、随時移り変わっていった。担任である筆者は、それぞれの幼児が興味・関心を示すものに関わる様子を見守ったり、共に遊んだりしていった。幼児期の学びは、学びの芽生えであり学ぶことを意識していないが、楽しいこと好きなことに集中することを通して、様々なことを学んでいくという学びの形態である。

一方小学校1年生は、タンポポを摘んでそれを腕時計や冠にして遊んだり、持参した自由画帳にタンポポの絵を描いたりしていた。タンポポの花にモンシロチョウが蜜を吸いに来て、その様子を観察したりもしていた。小学校1年生は、公園の自然物に対する探求に終始していた。担任である小学校教諭は、草花や虫などに興味・関心が向くような言葉掛けをしていた。児童期の学びは、自覚的な学びであり、学ぶことについての意識があり与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めていくという学びの形態である。

共通点は、子どもが自ら身近な事物や現象に働きかけたいような環境を準備し、子どもの主体的な取り組みを尊重するところであった。この共通点から、生活科は幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼稚園・保育所・認定こども園における幼児教育と小学校教育との接続の鍵を握る教科であると捉える。

以上のことから、生活科が創設されて30余年が経過した現在、幼児期に育成された資質・能力を基に、学ぶ喜びを感じ、学び続ける素地を育む生活科のあり方について、幼児教育との繋がりから明らかにすることを目的として取り組む。

2 生活科に求められるもの

まず、生活科が新設された状況とその背景を探った。1972（昭和52）年改正の『小学校学習指導要領』の第1章総則に、学校として配慮する事項として「各教科、道徳及び特別活動について、相互の関連を図り、発展的、系統的な指導ができるようにすること。なお、低学年においては、合科的な指導が十分できるようにすること。」¹⁾とある。この時点で、低学年の発達段階に即した総合的な教科の必要が指摘された。

その後、1987（昭和62）年の教育課程審議会最終答申にて、『小学校における各教科の編成等』で「一前略一低学年については、生活や学習の基礎的な能力や態度などの育成を重視し、低学年の児童の心身の発達状況に即した学習指導が展開できるようにする観点から、新教科として生活科を設定し、体験的な学習を通して総合的な指導を一層推進するのが適当である。生活科は、具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技術を身に付けさせ、自立への基礎を養うことをねらいとして構成するのが適当である。なお、これに伴い、低学年の社会科及び理科は廃止する」²⁾とある。この答申を受け、生活科は1989（平成元）年に新設され、1992（平成4）年度から施行された学習指導要領より小学校第1学年および第2学年に設置された。

1998（平成10）年に最初の改訂が行われた。ここでは、「生活科の学習状況として直接体験を重視した学習活動が展開され、おおむね意欲的に学習や生活をしようとする態度が育っており、生活科が小学校低学年の学校生活充実に寄与したと評価された。一方で、一部に画一的な教育活動が見られたり、単に活動するだけにとどまっていたりなどの問題も指摘された。」²⁾

2008（平成20）年の2回目の改訂では、「活動や体験を一層重視するとともに、気付きの質を高めることや、幼児期の教育との連携を図ることが目指された。」²⁾

そして、現行の学習指導要領は2017（平成29）年に改訂され、「①活動や体験を行うことで低学年らしい思考や認識を確かに育成すること、②幼児期の教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として滑らかに連携、発展させること、③幼児期の教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること」²⁾が求められた。

小学校低学年の児童の発達段階とはどのようなものであろうか。『子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）』（文部科学省、2008）の「3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題」を参考に考える。「小学校低学年の時期の子どもは、幼児期の特徴を残しながら

らも、『大人が「いけない」と言うことは、してはならない』といったように、大人の言うことを守る中で、善悪についての理解と判断ができるようになる。また、言語能力や認識力も高まり、自然等への関心が増える時期である。一中略一家庭における子育て不安の問題や、子ども同士の交流活動や自然体験の減少などから、子どもが社会性を十分身につけることができないまま小学校に入学することにより、精神的にも不安定さを持ち、周りの児童との人間関係をうまく構築できず集団生活になじめない、いわゆる『小1プロブレム』という形で、問題が顕在化することが多くなっている。』³⁾とある。

小学校低学年の児童の発達 は 幼児期の延長線上にあり、具体的な活動を通して思考する段階であることから、その実態に即した指導法が求められたと考える。また、子どもを取り巻く環境の変化から、社会性を十分に身に付けられないままに小学校に入学することによる対応も求められており、生活科を中心とした『スタートカリキュラム』の中で、幼児教育と小学校教育を滑らかに接続することが求められたと考える。

3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿から小学校低学年の学びへ

平成29年度改定の小学校学習指導要領の改訂のポイントとして、小学校入学当初における生活科を中心とした『スタートカリキュラム』の充実があり、幼児期に育まれた「見方・考え方」や資質・能力を、徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていくことが求められた。

また、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂のポイントとして、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を明確化し、従来通りの幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導を充実させながら、小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通して幼児教育の実践に当たることが求められた。これは、総務省統計局の平成29年度調査では、5歳児の43.9万人（43.2%）が幼稚園に、41.4万人（40.7%）が保育所に、14.7万人（14.1%）が認定こども園に、残る1.7万人（1.7%）が未就園である状況から、いずれの幼児教育・保育施設に在園する幼児であっても、満3歳以上の幼児は等しく幼児教育を受け、小学校以降の生活や学習の基盤である幼児期の終わりまでに育って欲しい姿が育成されるよう、整合性が図られた。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、到達目標ではなく、幼稚園教諭・保育士・保育教諭がこの姿を念頭に置きながら、一人一人の発達に必要な体験が得られるように幼児期にふさわしい遊びや生活を積み重ねていくと、5歳児後半に見られるようになる姿である。その姿が、小学校以降の各教科等の特質に応じた学びにどのようにつながるのか、『新しい学習指導要領の考え方』⁴⁾を元に捉えた。

具体的な姿としては、①健康な心と体「幼稚園生活（保育所の生活、幼保連携型認定こども園における生活）の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくりだすようになる。』^{5,6,7)}は、主に

「生活科」,「体育」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

②自立心「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、あきらめずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」^{5.6.7)}は、主に「生活科」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

③協同性「友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。」^{5.6.7)}は、主に「生活科」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

④道徳性・規範意識の芽生え「友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。」^{5.6.7)}は、主に「生活科」,「体育」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

⑤社会生活との関わり「家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園（保育所、幼保連携型認定こども園）内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。」^{5.6.7)}は、主に「生活科」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

⑥思考力の芽生え「身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。」^{5.6.7)}は、「生活科」,「国語」,「算数」,「音楽」,「図画工作」,「体育」,「道徳」,「特別活動」の全ての教科の学びにつながる。

⑦自然との関わり・生命尊重「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。」^{5.6.7)}は、主に「生活科」,「道徳」,「特別活動」の学びにつながる。

⑧数量・図形、文字等への関心・感覚「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。」^{5.6.7)}は、主に「国語」,「算数」の学びにつながる。

る。

⑨言葉による伝え合い「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」^{5,6,7)}は、主に「生活科」、
「国語」の学びにつながる。

⑩豊かな感性と表現「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」^{5,6,7)}は、主に「生活科」、
「音楽」、
「図画工作」、
「体育」の学びにつながる。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿全てが、具体的な活動や体験を通して身近な生活にかかわる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにすることを目標として展開される生活科の学びにつながる。生活科の科目が、幼児期の学びと小学校以降の学びをつなげる中核的な役割を果たすことを確認した。そこから、児童の発達に応じて徐々に各教科等の特質に応じた学びにつなげていき、小学校中学年頃には教科等の特質に応じた「見方・考え方」や資質・能力を育むとともに、教科横断的にそれらを総合・統合していく学びへと発展していく。

4 学び続ける素地を育む生活科のあり方

生活科の意義は、子どもが知らないものを知る喜び、創意工夫する喜び、わかるようになった喜び、出来るようになった喜びなど、「学ぶ喜び」を感じ、自信と意欲をもって学び続け、自分の生活や将来を豊かなものにしていくことにあると考える。

その最初の出発点、小学校入学当初に幼児教育と小学校教育の段差に躓く児童がいる。筆者が勤務していた幼稚園の向かいには小学校があった。そのような立地条件から、小学校に入学した1年生が学校帰りに幼稚園に立ち寄ることが良くあった。その際の「小学校はどう？」の問いかけに対し、「勉強の時間が長い」、「飽きちゃう」、「眠くなっちゃう」などの発言を聞いた。遊び中心の幼児教育から、教科学習中心の小学校教育への転換に戸惑う様子がうかがえた。1校が45分という授業の枠組みについていけないのだろうと予想した。生活科だけではなく、むしろ生活科以外の他の授業で、導入期の授業時間を分割したり、幼児教育のやり方を取り入れたりしながら、子どもたちの小学校の学び方への抵抗感を取り除くことが必要であると考えた。

1年生の5月の授業を参観した際に、授業の始まりに手遊びを取り入れ、児童が落ち着き教師に注目したところで授業内容に入っていた。また、30分程経過したところで児童が集中できなくなった様子を見取り、腕を伸ばすストレッチを行い体と気分をリフレッシュしてから、授業を再開していた。児童の集中時間を考慮した授業展開により、最後まで意欲を持ち続けて学ぶ様子が見られた。この学校とは、小学校のスタートカリキュラムと幼稚園のアプローチカリキュラム作りに共に取り組み、作成段階で何度か意見交換を行った。授業時間を15分、20分程

度で区切って学習内容を構成したり、活動性のある学習内容を取り入れたりすると良いのではないかという意見交換を基に授業が実践されたことで、小学校1年生の実態に応じた授業のあり方に繋がったと捉える。幼児教育から小学校教育へのステップを適度な段差とし、どの子ども登っていけるようにする配慮、そのための生活科を中心としたスタートカリキュラムが必要だと考える。児童は、安心して小学校生活をスタートし、楽しさを感じながら自覚的な学びをスタートすることが、学び続けていくためには必要である。

つぎに、幼児期の遊びを通した子どもの学びと育ちを小学校教育につなぐという視点で考える。幼児期の後半には協同的な学びが展開される。どのようなことかという、幼稚園の年長2月に遊園地を作って、年中児と年少児を招待しようというアイデアが持ち上がった。前年度の年長児が修了前に自分たちにしてくれたことを思い出しての発案であり、学級のみならず取り組むこととなった。どんな遊園地にするか話し合い、コーヒーカップ、ジェットコースターを作ることとなった。どうしたらコーヒーカップとジェットコースターが作れるか考えながら園内を見回すうちに、砂遊び用のたらいにキングブロックのタイヤを付けてコーヒーカップを作ることを思いついた。また、キングブロックで作った車を幅広の滑り台の上から走らせ、ジェットコースターにすることとした。適当な素材を見つけた喜びに沸き、試行錯誤しながらタイヤを取り付けコーヒーカップらしくなった時の喜び、滑り台の上から車を走らせるとスピードが出てジェットコースターのスリルが味わえた時の感動は大きく、共に取り組んだ仲間と完成を喜び合った。まさに、自分たちで創意工夫する喜び、出来るようになった喜び、学ぶ喜びを感じた活動であった。また、友達と共通の目的を見いだして遊びを進めていき、様々な発見をしたり、思考をしたり、想像力を働かせたり、友達とコミュニケーションをとったりした。

この遊びの中で様々な姿が育つことが期待される。領域「人間関係」に関わる「自立心」や「協同性」、領域「環境」に関わる「思考力の芽生え」、領域「言葉」に関わる「言葉による伝え合い」、領域「表現」に関わる「豊かな感性と表現」である。5領域全てと幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿のうち5つの育ちが関わっている。幼児教育の特徴である遊びを通しての総合的な指導である。この幼児期の学びの芽生えがあって、小学校以降の自覚的な学びへつなぐと捉える。生活科の学びでは、幼児期の終わりまでに育った姿が存分に発揮できるような工夫がされることが望まれる。その際に、幼児期の学びをなぞるのではなく、ステップアップすることが重要である。自らの思いや願いの実現に向けた活動にじっくり取り組めるような生活科の時間の確保、単元の構成に留意しながら、児童が自分の成長を自覚し、学ぶ喜びを感じられることが必要である。

さらに、小学校教育における各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程、時間割に沿った1日の流れの中で、生活科の科目を通して子どもの思いや願いを生かした学びの実現が望まれる。

生活科では、「自分」との関係性をもって存在する「人や社会、自然」との関わりが重視され、低学年の児童によき生活者としての資質・能力を育成するために、9つの内容で構成され

ている。「第1の階層として『学校、家庭及び地域の生活に関する内容』の（1）学校と生活、（2）家庭と生活、（3）地域と生活、第2の階層として『身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容』の（4）公共物と公共施設の利用、（5）季節の変化と生活、（6）自然や物を使った遊び、（7）動植物の飼育・栽培、（8）生活や出来事の伝え合い、第3の階層として『自分自身の生活に関する内容』として（9）自分の成長である。（9）は、内容（1）～（8）の全ての内容との関連が生まれる階層として捉え、1つの内容で独立した単元構成も考えられるし、他の全ての内容と関連させて体現を構成することも考えられる」⁸⁾とある。

子どもはよき生活者としての資質・能力及び態度を形成していくために、実際に対象に触れ、活動することが求められており、幼児教育の「環境を通しての教育」と重なる。また、1つの単元で複数の内容を学ぶところも、幼児教育の「遊びを通しての総合的な学び」と重なる。子どもの思いや願いが達成できる学びを積み重ねることで、生活科が目指す「自立への基礎を養う」ことが目指され、「学習上の自立」、「生活上の自立」、「精神的な自立」の特に「学習上の自立」につながると考える。

幼児教育の段階でも、小学校以降の自覚的な学びに取り組めるように、「生活上の自立」として、自分の身の回りのことは自分でできるように、登下校時に安全に気を付けて行動できるように、集団生活の決まりを守れるようになどを旨とする。また「学習上の自立」として、遊びの中で周囲の環境とかかわり、考えること、表現すること、工夫することが出来るようになることを目指す。さらに、「精神的な自立」として、生活の様々な場面で自分なりに考えて行動できるように、友達や保育者と共に生活する中で自分の良さや可能性に気付くことを目指して保育に当たっている。それは、小学校生活への適応に向けた一旦の自立であり、生活科での「自立の基礎を培う」へとつながるものである。

5 ま と め

生活科が創設され、30年が経過した。その間、生活科の設置の理念である小学校低学年の発達状況に応じ、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を培う」⁸⁾という点についてはなんら変わりなく、脈々と取り組まれてきたと捉える。その成果として、直接体験を重視し学習活動を展開することで、小学校第1学年、第2学年の児童が意欲的に学習や生活に取り組もうとする態度が育っていると評価されている。しかし一方で、今までにない学習形態であることから、単に活動するだけにとどまっていたり、画一的な教育活動が見られたりするなどの指摘もあった。

生活科の学習活動の展開と重なるところの多い幼児教育は、幼児期の発達の特性である「自然な生活の流れの中で直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎を培う」⁹⁾を捉え、「教育は環境を通して行う」ものとし、「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心」⁹⁾として

実践されてきた。しかし、生活科の振り返りと同様に、活動が先行する幼児教育の実践も指摘され、幼児をどのように育てるかではなく、何を経験させるかを重視する幼児教育の実践も一部見られた。

小学校生活科にも幼児教育にも共通することは、「具体的な活動や体験を通しての教育」は手段であって、生活科は「自立への基礎を培う」こと、幼児教育は「人格形成の基礎を培う」ことという目的を忘れてはならない。

近年の少子化、核家族化、都市化、情報化などの急激な変化を受けて、子どもの生活は閉鎖的になっている。そのような状況であるからこそ、学校教育の中で「自然」、「他者」、「自己」、「社会」と出会い、具体的な活動や経験を通して自立の基礎を培う生活科は、子どもの育ちにとって重要な役割を果たす教科と言える。生活科創設の理念を念頭に置きながらも、変化の激しい時代のニーズに応じた生活科のあり方を今後も探していきたい。

6 引用文献

- 1) 文部省 (1972), 小学校学習指導要領, 国立教育政策研究所教育研究所データベース
<https://www.nier.go.jp/guideline/s52e/index.htm> (情報取得2021/1/10)
- 2) 關浩和 (2019), 生活科カリキュラム・マネジメント, ふくろう出版, pp6-11
- 3) 文部科学省 (2008), 子どもの徳育の充実に向けた在り方について (報告)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286156.htm (情報取得2021/1/10)
- 4) 文部科学省 (2017), 新しい学習指導要領の考え方
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/news/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_2.pdf (情報取得2021/1/10)
- 5) 文部科学省 (2017), 幼稚園教育要領, フレーベル館, pp5-8
- 6) 厚生労働省 (2017), 保育所保育指針, フレーベル館, pp10-12
- 7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2017), 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, フレーベル館, pp5-7
- 8) 文部科学省 (2017), 小学校学習指導要領解説 (平成29年告示) 生活編, 東洋館出版社, pp26, pp8
- 9) 文部科学省 (2018), 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, pp17, pp26

Life sciences that nurture the foundation for continuing to learn
— From the connection with early childhood care and education —

KUDO Yukari

Abstract

The life sciences, which were established in the first and second grades of elementary school from 1992 (Heisei 4), became the first step of the cooperation currently being carried out between kindergartens, nursery schools, Kindergarten cooperation type certified child institution and elementary schools. It is also a central subject for smooth connection between early childhood education and elementary school education. Life science is a learning content and educational method that is in line with the developmental situation of the lower grades of elementary school, which is an extension of early childhood development. It was required to guarantee the connection of growing up. On the other hand, the early childhood education side also clarified “I want you to grow up by the end of early childhood” from the 2017 (2017) revised kindergarten education guidelines, nursery school childcare guidelines, and kindergarten cooperation type certified childcare education and childcare guidelines. It was required to practice early childhood education in anticipation of a connection with education after elementary school and lifelong learning.

We have derived three things as the ideal way of life science to nurture the foundation for continuing to learn. First of all, during the introductory period, which is the starting line of elementary school education, we made appropriate steps such as dividing the class time including life science and other subjects and adopting the method of early childhood education, and every child climbed the step. To be able to go. Secondly, in order to connect from the seedlings of early childhood learning to subjective learning after elementary school, it is necessary to fully demonstrate the appearance of growing up by the end of early childhood. At that time, instead of tracing the learning of early childhood, step up so that the child can feel the joy of learning and being aware of his / her own growth. Thirdly, in the curriculum that systematically learns the learning contents of each subject in elementary school education, in the flow of the day according to the timetable, by realizing learning that makes use of the thoughts and wishes of children through the subjects of life science is there. With reference to “education through the environment” and “comprehensive learning through play” in early childhood education, we will accumulate learning that can achieve the thoughts and wishes of children and lead to “independence in learning”. Due to the recent declining birthrate, nuclear family, urbanization, and computerization, children’s lives have become closed. Because of this situation, life sciences that meet “nature,” “others,” “self,” and “society” and cultivate the foundation of independence through specific activities and experiences are important for raising children. It can be said that it plays a role.

Keywords: Start curriculum, What you want to grow up by the end of early childhood, Steps, The seeds of learning, Subjective learning, The foundation for independence